

第2分科会 話題提供5

山形大学の挑戦—「山形大学エリアキャンパスもがみ」に見られる地域連携のあり方—

山形大学

杉原 真晃・小田 隆治・出川 真也

1 研究の目的

従来、地域と大学の連携といえば、地域の企業あるいは官公庁等と大学の研究機能を連携させた産学連携（あるいは産学官連携）、大学の専門教育機能を連携させたインターンシップ等が代表的であった。本発表では、これらとは異なる形として、より広い地域の諸活動と大学の非専門教育（教養教育）機能を含めた大学全体としての総合的な機能を連携させた取り組みを対象として、地域と大学の連携による双方にとってのメリットとそれによる連携の持続可能性という観点から、地域と大学が行う連携の新たな形を検討した。

2 研究の方法

本研究では、山形大学と山形県最上広域地区の8市町村で結ばれた包括協定により立ち上がった「山形大学エリアキャンパスもがみ（YAM）」での取り組みを対象に、報告書、ホームページ、フィールドワーク、インタビュー等から得られたデータをもとに考察を行った。

3 エリアキャンパスもがみの特徴

山形大学は、平成16年度に山形県最上広域地区8市町村と包括協定を結び、大学と最上広域圏が連携を行う「山形大学エリアキャンパスもがみ」（以下、「エリアキャンパスもがみ」と表記）を設立した。



図1 エリアキャンパスもがみにおけるエリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト構成図

この協定の締結の契機となったのは、山形大学が実施しているSD（Staff Development）である。平成16年度のSD「山形大学活性化プロジェクト—地域に飛び出してみよう—」における取り組みの1つが最上広域地区を訪ね、そこで「最上地区山形大学『指首野川キャンパス（仮称）』構想」という提案を受けた。この構想案が非常に有望な要素に満ちていたため、山形大学と最上広域地区は、本格的に最上広域地区に山形大学の拠点形成を行うこの構想の実現化に向け検討を重ねた。その結果生まれたのが「エリアキャンパスもがみ」である。

エリアキャンパスもがみは、大学の物理的なキャンパスというハード面を新たに作ることを行わず、その「キャンパス機能」というソフト面を新たに地域に持たせるソフト型キャンパスである。ここでは、「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト」というプロジェクトが着手され、地域と大学とのダイナミックな双方向的連携により、「地域の人材育成と活性化」と「大学生の課題探求能力の育成」が目指されている（図1）。

4 事例検討1（初年次教育）

取り組みの中心をなすのは、教養教育科目であり山形大学が初年次教育として位置づけている授業科目「フィールドワーク 共生の森もがみ」である。この科目では、最上広域地区における文化や人材育成活動そのものを「未来遺産」と名付け、地域の「達人講師」の指導の下、学生が最上広域地区8市町村選りすぐりの「未来遺産」の活動に参加する。それにより、学生は地域の文化や地域の活性化と人材

育成にまつわる成果と課題を感じ・考えることを通して課題探求能力を育み、「自然との共生」、「文化との共生」、「地域との共生」について深く考えるようになる（山形大学は、「自然と人間の共生」、「充実した人間教育」、「社会との連携重視」を、21世紀の基本理念として掲げている）。そして、同時に、地域の「未来遺産」は大学と共鳴することでさらに活性化し、世代を超えて発展していくことが目指される。本授業は、平成18年度より開講され、18年度は前期12プログラム（117名受講）、後期5プログラム（89名受講）、19年度は前期14プログラム（142名）、後期8プログラム（人数未定）であった。

授業は、大きく、①ガイダンス、②1泊2日（×2回）の現地体験学習、③活動報告会から構成される。

ガイダンスでは、未来遺産の活動に関わる地域の人々が大学に足を運び、自らの地域の未来遺産を通じた教育プログラムを学生に紹介する。学生は諸プ



写真① ガイダンスの様子



写真②（左右とも） 現地体験学習の様子





写真③ 活動報告会の様子

プログラムの中から自分が参加したいものを選択する。多くの場合は第1希望で決定するが、人数の都合上、第2・第3希望に回る学生もある。各プログラムには10人前後の学生が少人数グループを形成して参加する。

1泊2日(×2回)の現地体験学習では、学生は地域の諸活動へ参加し、現地の人との交流を深める。民泊を取り入れているプログラムもあり、学生は活動の合間の日常的な会話も含め、地域の生の声に触れることになる。現地体験学習では、単に体験するだけでなく、そこで行ったこと、感じ・考えたことを活動記録として記述し、さらに「もがみ感想レポート」として、地域の人々に読んでもらうことを前提に事後レポートを書く。それを通して、学生は体験を通して知り・感じた地域の伝統、諸活動、人々の素晴らしさ、および地域活性化の課題等を改めて考察する。

活動発表会では、学生はグループ毎に活動のふり返りや事後レポートを題材にプレゼンテーションのファイルとハンドアウトを作成し、10分程度の活動報告と質疑応答を行う。これにより、受講学生は、他のグループがどのような体験をし、どのようなことを学び・感じたのかを共有することが可能となる。

この活動記録、「もがみ感想レポート」、活動報告会により、学生の体験は学びとして彼ら／彼女らに刻み込まれていくのである。これは単位の実質化にも有効な手段といえよう。

5 地域と大学との相互貢献

「フィールドワーク 共生の森もがみ」は、地域

からも学生からも好評を得ている。と同時に、大学としても一定の手応えを感じている。そのわけを紐解いていくと、そこには、地域・大学・学生それぞれにとってメリットがあり、それにより地域と大学に相互貢献の関係が成立していることが明らかとなった。

地域にとってのメリットには、地域のことを知ってもらえる・将来地域に根づいた活動をしてもらえるといった可能性の向上、学生がやってくることによる経済的効果等があることが伺われた。大学にとってのメリットには、地域と大学がともに活性化していくことや競争的資金の獲得等による財政基盤の確立、学生にとって魅力的な教育プログラムの提供等があることが伺われた。そして、学生にとってのメリットには、実地体験による高い動機の発生、身近な地域における伝統・活動等の知識・技能の獲得、問題発見・課題探求という現代に求められる能力の育成等があることが伺われた。

このように、地域と大学(そして、学生)にとって「フィールドワーク 共生の森もがみ」は各々メリットを持ち、相互貢献の関係が成立しているといえるのである。

エリアキャンパスもがみでは、「フィールドワーク 共生の森もがみ」の他に、「もがみ専門科目」、「学社融合共育プログラム」、「もがみの元気創出プロジェクト」、「もがみ自然塾」等、専門科目や研究活動、課外活動も含めた総合的な連携を行っている。以下では、それぞれの取り組みの代表的なものを取り上げ、そこに見られる地域と大学、そして学生にとってのメリットを検討する。

6 事例検討2(専門教育)

「もがみ専門科目」は、大学の専門教育課程の科目を最上広域圏でのフィールドワークを通して行うものである。主なものに、人文学部の専門科目「地域づくり特別演習」、理学部の専門科目「野外実習」等がある。

このもがみ専門科目における地域にとってのメリットには、地域連携資源の活用と大学・地域への還元という地域のコンセプトの実現、専門的知識・技能の地域活動への活用等があることが伺われた。そして、大学にとってのメリットには、研究フィールドに学生を連れていくことで研究を通して教育を

行うことができる研究と教育の融合がある。さらに学生にとってのメリットには、「フィールドワーク

共生の森もがみ」と同様、学生の実感を伴った学びと高い動機というメリットがあることが伺われた。

また、「学社融合共育プログラム」という取り組みも行われている。これは、教育学部の教員による、地域の小・中学校を対象にした授業改善研修と教育研究、そして地域による教育学部生の教育体験の場の提供を通じた「地域共育カリキュラム」の創造を目的とした活動である。年間を通じ10数回ほど実施されている。

ここでは、地域にとってのメリットには、地域教育力の向上、地域の学習者・現職教員の研修等があり、大学にとってのメリットには、大学生（教育学部）の教育体験（実習）があり、そして、学生にとってのメリットには教育体験による知識・技能の深まりがあり、さらに、地域の学習者としての児童・生徒にとってのメリットには、教育力の向上による学びの深まりがあることが伺われた。

7 事例検討3（研究）

エリアキャンパスもがみでは、上述した専門科目に関連するフィールド研究が行われている。さらに、地域の有志と大学教員が共同で自然環境やまち作りに関する研究会を開いている。この研究会による研究活動は「もがみの元気創出プロジェクト」と名付けられ、年に数回の会合が開かれるとともに、年1回実施される「タウンミーティング」においてその研究成果が発表されている。

ここでは、地域と大学研究者が共同で研究を進めていくことにより、地域にとっては、研究会に参加している地域住民の学びと、それによる地域の自然環境保護やまち作りの推進というメリットがあり、大学にとっては、フィールド研究の進展というメリットがあることが伺われた。

8 事例検討4（課外活動）

正課の授業とは異なる課外活動として「もがみ自然塾」が実施されている。これは、フィールドを生かしたブナの森探索や天体観測などの体験学習を地域の小・中学校の児童・生徒が行うものであり、大学教員および大学生がその引率を行っている。

ここでは、地域にとってのメリットには、地域の子どもたちに自らの地域の自然の良さ・不思議さ・おもしろさを知ってもらうということがあり、地域の学習者としての児童・生徒にとってのメリットには、地域の良さ・不思議さ・おもしろさを知ると同時に、大学の教員や大学生と触れ合うことによる知的刺激があり、大学にとってのメリットには、フィールドとの関係づくり、そして大学を知ってもらうということがあることが伺われた。

9 総合考察

以上から、次のような考察が可能となる。

エリアキャンパスもがみには、大学が本来持っている研究、教養教育（初年次教育）、専門教育、課外活動といった多様な活動が含まれ、これら複数の活動による地域と大学との連携と、それによる相互貢献の関係が蜘蛛の巣のように張り巡らされていた。この相互貢献には、経済的なものだけではなく、知的・文化的なもの、さらには人材育成的なもの、人的ネットワーク的なものが存在していた。このような相互貢献の網状化により、エリアキャンパスもがみは全体として、経済的・文化的価値を共有・創造する場、金融資本・人的資本・社会資本を育む場として成立するようになったといえる。それにより、地域と大学の連携は持続可能性を保ち、地域は学習地域（Learning Region）と成長していくと考えられる。学習地域としてのエリアキャンパスもがみには、達人講師を中心とした実践共同体、学生と地域の人々との学習共同体、大学の教員・学生と地域の人々との学習共同体といった多層的な実践共同体が関連を持ちながら存在している。それにより、学生は、地域での実践を通して自らの「生きること」や「生活」を考える「Learn for life」を行うようになる。ソフト型キャンパス「エリアキャンパスもがみ」は、地域と大学の「協働、価値の共有・創造」の場として成立しているのである。

〈謝辞〉

この研究発表および研究集録の原稿作成にあたっては、「フィールドワーク 共生の森もがみ」の取り組みをはじめ、山形県最上広域地区の方々のさまざまなご協力がありました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。